

「かみなりおかあさん」

富澤 晃士朗

ぼくは、三人かぞくです。せがたかくて、いままでおこったことがない、おとうさん。

まい日、「いそがしい。いそがしい。」

と、いそいでいる、おかあさん。今日は、おかあさんについて、書きます。

おかあさんのしごとは、先生です。しごとでは、やさしい先生だとほくに、おしえてくれました。でも、ないしょの話です。おかあさんは、まい日、ぼくをたくさんしかります。だから、しごとでも、こわい先生だとぼくは、うたがっています。朝六時、「もつとていねいにひきなさい。」朝ごはんの前から、おかあさんは、しかっています。ぼくは、まい朝、ピアノのれんしゅうをしています。

学校からまずかえつてくると、しゆくだいのほかに、ドリルを、四まいやります。しごとからかえつてきたおかあさんは、つぎの日の、ごはんの、下ごしらえをしながらかみなりを、たくさんおとします。「ていねいな字でかきなさい。」ゆつくり、考えれば、まちはがえないでしょ。「ごはんの時間です。」左手でささえなさい。やさいもしつかりたべなさい。すきなものだけたべてはだめよ。」

まい日まい日、おかあさんかみなりがおちるので、ぼくは、六月の土曜日、かみなりが

おちる前にいえを出ることにしました。いきさきは、そうぞうのもり、ザリガニを、とることにしました。ザリガニがつかれたらもちろん、いえにかえることにしました。ザリガニが、とれませんでした。かえり道いきさきを言わないで、出かけたことを、おかあさんはとてもおこるんだろうな、どんな、大きなかみなりがおちるんだろうと、ドキドキしていました。いえの前の、こうえんにつくと、おかあさんが、いました。「うわっかみなりがおちる。」と、思ったしゅんかん、おかあさんは、ほくを、だきしめながら、「こうちゃん。」と言いながらないていました。おかあさんのなみだを見ると、なぜか、ほくの目からなみだがあふれてきました。「ごめんさい。」ほくはなきながら、かってに出かけたことをあやまりました。おかあさんは、なきながら、ほくのあたまと、ほっぺと、かたを、さわりました。そしてこう言いました。「こうちゃんがにげたくなるほど、しかってごめんね。」「こうちゃんは、たからもの。だいじ。たいせつだから、もうかってに出かけたりしないで。」ほくはなきながら、何かいもうなずきました。今日も、ほくはしかられています。でも、おかあさんのかみなりは、たからものほくにしか、おちないのです。だから、ほくは、かみなりをたくさんうけて、いつかおかあさんみたいに、自分の子どもにも、あたたかいかみなりをおとしたいです。

おかあさん、いつも、しかってくれて、ありがとう。やさしいおかあさんもすきだけど、かみなりおかあさんもだいすきです。

評価のポイント

起承転結があり、物語としても通用する。母と子の絆をえがけている。